

また遙かない 切り崩し

(6)

葉月一郎

え・小西保文



この女は、なにを企んでいるのだろうか。動搖をみすかされまい、と心に鎧を着ながら、戸波は亜紀子の横顔をさぐつた。

一瞬、その透明なほど白い頬に、微笑が走って消えた。嘲笑、と戸波は受けとめる。だが、突差に切り返すことをが見当らない。それが、もどかしい。

その耳に、亜紀子の声が届く。

「たのしみにしてますわ、キャンペーン。きっと、効果的な記事が載るでしようね」

乾いた、無感動な口調である。

怒りに似た感情が、噴き上ってきた。

「君は、それをうために、僕を呼んだのか」

「そうじゃありません。本当に、お友達になりたかっただけですのよ」

あらすじ 昭和四十五年秋――。毎朝新聞神戸支局の戸波記者は、地元の大手企業兵庫製鉄の公害キャンペーんに加わるよう石津支局長に命じられた。新聞のむなしさを知り仕事に意欲を失っていた戸波は、これを断つて、バーの女ユカとの情事に溺れてゆく。たまたま、兵庫製鉄の下請会社につとめる堂本敏夫の無罪判決の記事を書くが、このために堂本は堂本を解雇する。復職の嘆願を行った戸波は、かつて静づらいにからまれて救つてやった兵庫製鉄秘書課の細川亜紀子と再会する。ある朝、戸波はユカの洗濯ものに一面に付着する黒い斑点に気付く。それは兵庫製鉄の降下ばいじんだつユカが無意識のうちに鼻先へ突きつけてくれた被害の告発状。突然戸波はこの仕事に意欲が湧く。翌日亜紀子と花瓶へ販みに行つた時、この秘かに発見したキャンペーンのことを知つていているといふ。何ということだ。敵の手ごわさをいきなり思ひ知らされた。

またも、微笑が走つた。

挑発的な笑みに見えた。

社長に会見を申入れているから、「毎朝新聞が何か動き出した」とぐらはいは当然わかるだろう。

しかし、『七人の侍』などという、特別取材班につけられたニックネームは、ごく内輪の話で出ただけなのに。

戸波の中の平衡感覚が、崩れて揺れた。

運ばれたウイスキーを、一気に飲み干す。

「じゃ、今夜は、すべてを忘れて、徹底的に飲むとするか。われわれの友情のために……」

「ま、うれしい、といいたいところだけど、私、今夜は

門限十時。弟が郷里から出て来てますの」

「弟？ ハゲかヒゲか、中年の弟なんてのは、もう古いよ」

いらだちが、戸波を襲つた。

(どつちみち強敵やな)

態勢の建て直しを意識の底で考える。

店の入口で、ざわめきがした。客を迎える女将の、は

なやいだ声が弾む。

「お、細川君。珍しいな」

底抜けに陽気な声がして、中年の男が亜紀子に近づいてきた。

「ま、部長さん。えらいところを見つかったわ」

亜紀子が、思わず腰を浮かす。

「や、これは失礼。お連れが、いらっしゃるのか」

肥満児が、そのまま年をくつたような感じの男である。

おそらく度の強い眼鏡が、その福々しい丸顔に乗つかっている……。

「部長」と呼ばれたその男は、戸波に会釈して、小腰をかがめた。

「どうも、失敬しました」

「あ、部長、ご紹介しますわ。こちら、毎朝新聞の戸波記者さん」

「お、毎朝さん、これはどうも」

男は、ポケットから名刺を抜き出すと、いんぎんに差出した。

「いつも、お世話になつてます。どうぞ、よろしくお願ひします」

《兵庫製鉄本社総務部長 花房圭之助》

一周り大きい名刺には、これまた一段と太い活字がアグラをかいでいる……。

「戸波です」

軽く頭を下げる。下げながら、心の奥底に戦慄が走るのを意識する。

亜紀子と総務部長は、偶然に出会つたわけではあるまい。はじめから、こうしてつながりを持つように筋書きができていたに違いない——。

花房部長は「委細かまわぬ」といった様子で亜紀子の向う側に腰をおろすと、ビールを受取つて、ヌツと突き出してきた。

「いかがです。いっぱい」

「いや、私は、ウイスキーをやつてますから……」

突き放すような口調で、はつきり拒否の姿勢をとる。

(スキをみせては、なるまい)

頬を硬くして、戸波は軽く唇をかんだ。

「戸波さん、どうです。ここでは何だから、奥の座敷の方で、ひとつ、いかがですか。お近づきのしるしに……」

「いや、結構です。私は、ここで失礼します」

「まあ、そう固いことおつしやらずに……」

「カウンターの方が、好きです」

「そうですか」

いくらか未練を残した調子でいうと、花房部長は急に影のある笑みを浮べた。

「おたくの支局長だって、私どもと食事をしておられるんですよ。まあ、気軽に、お付合い願いたいのですな」支局長が——その一言が刺さつた。……そんな筈がない。

戸迷いをかくして、とがめる視線を返した。度の強い眼鏡が、それをさえぎつた。

「いやあ、これは気がつかなかつた。どこかクラブの、女の子のいるところへご案内しましょ。その方が、いい。細川君、君も一緒にどうかね」

ヌメヌメした粘っこい口調を、ふるい落とすように立上る。

「失礼します」

「一万円札を女将に押し渡す。

「また来る。つりは、そのとき……」

急ぎ足で、出る。

どこか潮の香をはらんだ夜風が、逆立つように足元から吹き上げてきた。秋の深まりを告げるような細い風で

酒や金で、新聞記者を誘惑する。方法としては、古く

て新しい。ヘタなようで、いま最も効果的かもしね。

誘われた経験が、ないわけではない。

だが、不思議に、怒りの感情はわかなかった。

（敵は、つまり兵庫製鉄は、まず正攻法でワナをかけた

きた。しかも、手の内には、かなりの情報をつかんでい

る。次は、どんな手を打つてくるか）

『七人の侍』の一人つづを、ゆさぶろうというのか。

支局長や、キャブテン格の戸波を、集中攻撃するつも

りなのか。

（支局長は、一緒に食事しますよ）

顔に似た、肉太の声が鼓膜に残っている。

花隈本通りへ出て、タクシーを捜した。三人連れの酔

客がゆらゆら揺れながら通りすぎた。

「お送りしますわ」

湿った声と、くすぐるような香水のにおいが寄り添つ

てきた。細川亜紀子の、月あかりを受けた白い頬が、すぐ背後にあつた。

「せっかく来ていたのに、すみませんでした」

長い髪が、また揺れている。

不意に、凶暴なにかが、戸波の血を騒がせた。

（この女を、人々にしたい。すつ裸にして、思いきりもてあそんでやりたい……）

カマトトめ——低く、つぶやく。

これが、大会社の秘書嬢か。威厳に満ちた重役たちに

取囲まれて、優雅に、誇り高く振舞つている白い蝶——。

「え？ なにか……」

「僕が送ろう。いや、もう少し、飲みに行こう。ヘンな中年男抜きで、ね」

「ま」

まるで予期していたように、つかまれた腕をほどこうともせず、亜紀子は口元をゆがめた。ダダッ子をあやすのに似た眼で、唇だけが微かに笑つている。

「ああいうタイプ、おきらいでしょう」

「しめし合わせて、総務部長があとで出てくるなんて、底がみえてるぞ」

それには答えず、亜紀子は言葉を続けた。

「あれで、やり手なんですよ。社内じや、切れもので通つています」

「やり手の切れものなら、君もそうやな」

はぐらかすような微笑を残して、亜紀子はタクシーを止めた。

和久井社長は一段と声を高くした。

「どうしても、そのインタビューに出席しろといふんかね」

兵庫製鉄の役員会議室は、基幹産業の「大奥」にしては意外なほど質素である。

壁に掛かった歴代社長の肖像写真をじろっと眺めると和久井社長は一段と声を高くした。

（どうしても、そのインタビューに出席しろといふんかね）
もともと地声の大きい男である。それが、怒ったような表情で声を張り上げると、文字通り割れ鐘のような響きがした。

しかし、総務部長の花房は、語調を変えようとしなかつた。

「はあ、何といつても毎朝新聞は、影響力があります。ヘタに拒絶した結果、逆恨みの記事をボンボン書かれる」と、あとで工場周辺の住民対策が何倍も困難になります。それよりは、一応こっちの言い分をしゃべつて頂いた方

が……」

「しかしながら」

和久井は、左足の靴を脱ぐと、グイと椅子の上へ上げた。

「新聞なんてもんは、飽きっぽいんだよ。公害キャンペーンも、君、せいぜい半年か一年で消えてしまうさ。先月の日経連の会議でも、大方の意見は、そうだったな」「でしような」

大北専務が、大きく合槌を打つた。

「新聞が、ごじゃごじゃ書いてる間だけ、われわれはじっと首をすくめとりやいい。塹濠戦ちゅうわけですよ」

「私は、それは思えないのです」

一步もひかぬ構えで、花房部長は度の強い眼鏡を光らせた。

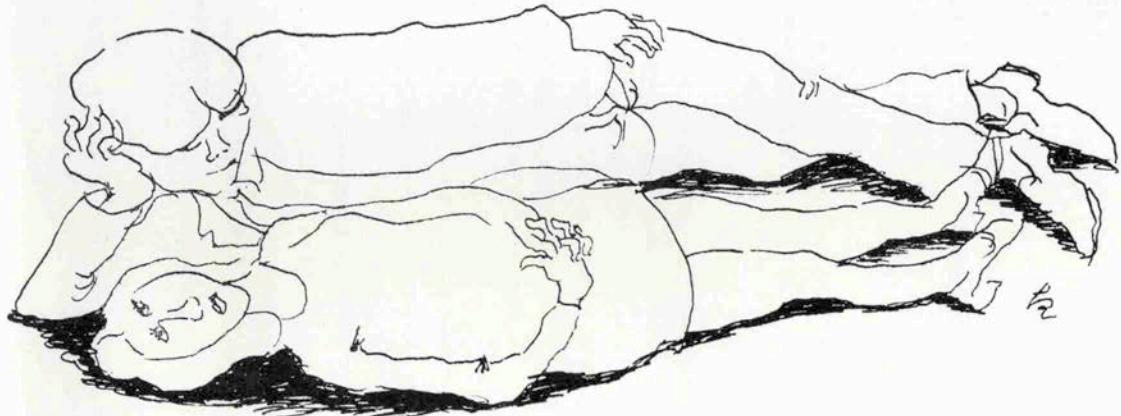
「データがあります。第一に、この工場周辺の住民の中に、根強い民商組織がある。まだ、ごく一部ですが、連中が自治会の役員を占めるところも出てきた。このグループが、新聞と結託すると、ことは面倒になります」

もう秋も深まりかけているのに、汗かきの花房はしきりに首筋のあたりをハンカチでぬぐつた。

「つまりですね、この際、むしろ、新聞を利用して、こちらから住民に先制攻撃をかける。わが社がいかに社会に貢献しているか。しかも公害防止にはこんなに大金を注ぎこんでいるんだ。そういう実態を積極的にPRした方が、むしろ説けるよりもプラスじゃないか、と思いませんか」

「フム——」という表情で和久井は身を乗り出しかけた。この野人型の経営者は、「攻撃」という言葉に食指を動かされたらしかった。

「新聞は、なるほど浮気っぽい。すぐ飽きてしまう。情報は、いつも使い捨てである。たしかに、その通りです。しかし、今度のようなティー・マだと、住民つまり読者は自分の生活にかかるのが大きいから、逆に新聞に食いついてゆく。



住民と新聞が二人三脚になる可能性は、かなり強い。そうなると、これは半年や一年で終わらなくなりますよ」花房は、自分の発言の効果を確かめるように、同席している役員の表情へゆっくりと視線を流した。

そこまで一気に説明すると、細川亜紀子は急に口をつぐんだ。

浜辺の砂を洗う波の音が、にわかに高鳴って耳に届いた。星が、ひとつ流れた。

この須磨海岸まで、亜紀子はタクシーでまっすぐに戸波を誘つてきたのである。とっくに水泳シーズンが終つて、浜には無気味な沈黙が立ちこめていた。タクシーを降りると、まるで先客が待つてゐるところへ案内するよう亜紀子の足どりだった。

波打際に近い砂山に腰をおろして、二人はしばらく海をみつめた。

そんな想いで、戸波は黙つて亜紀子に従つてきただ。その期待にこたえたのか、はぐらかしたのか、亜紀子の口をついて出たのは、きょう昼間の、兵庫製鉄における役員会の内容だった。

とまどい、真意を疑い、そして次第にひきこまれ、戸波は聞き耳を立てていた。

(そうだ。支局員自身さえ、この企画に最初は驚いたのだ。相手の兵庫製鉄が対応策に頭を悩ませたのも当然だろう)

おそらく、その場に居合わせたのだろう、亜紀子の話には臨場感があった。生々しかった。

月あかりをうけて、白い頬はいつそう深さを増していく。花隈で感じたあの狂暴な気持が、いつの間にか戸波の中から消えているのに戸波自身は気付いていない。しばらく波の旋律だけが二人を支配した。

まるで脈搏のように、それは規則正しく流れてきた。

「それで、結論は、どうなつたの」

先に口を開いたのは戸波であった。
亜紀子は、チラと戸波を眺めると、黙つてそのまま砂の上へ背を倒した。ハンドバッグを枕がわりにして、垂直に夜空をみつめた。

「総務部長の意見が通つたようです。ただし、条件つきで……」

「条件——？」

「そこか投げやりだつた亜紀子の語調が、急に硬くなつてきた。表情も、蠟細工の能面に似た硬さである。

片肘をついて上体を倒すと、戸波は亜紀子と並ぶかたちになつた。

亜紀子は、身じろぎもせず、上空の一点に眼を据えている。

形のよい脚が、砂浜に伸びていた。仰向いたまま両腕を胸の上に置いて、無防備な姿勢とも見えた。えんじ色のベルベットのワンピースがかなりすり上がり、肉付きのいい太ももの大部分が月あかりにさらされている。しかし、その挑発的ともとれるボーッズにも戸波の心は動かなかつた。

兵庫製鉄の首脳部は、毎朝新聞の挑戦に受けて立つ、という。逆に、先制攻撃の構えで臨むことも予想される。

ふと、武者ぶるいに似た戦慄が、背筋をよぎつた。

「条件つて、どんな内容なんかな」

もう一度、さりげなく切り出す。

亜紀子は、すぐ真上へ近づいた戸波の顔に、針のような視線を当てた。

「新聞社の切り崩しをすること。神戸支局はもちろん、本社の広告部、経済部……あらゆるところへ手を回して、このキャンペーンをやめるよう働きかける。その工作を平行してやるのが条件です」

(つづく)

曲線ハイウェイ

武田繁太郎
え・横塚



〔あらすじ〕 東名高速サービスエリアで多木洋介は神戸の女性宇津康子と知合い、逢瀬を重ねるうちに康子にひかれていた。ある日友人岡本和彦と共に神戸へきた多木は康子に会えず、彼女の面影に似た辰野英子を紹介され、六甲山へドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて英子を抱きしめた多木の胸に、初めて感じないとおしさがつり、その夜二人は愛しあって別れた。

そんな突如として康子から電話があり、多木と康子は二人の愛を確かめあった。翌朝、風のように去つていった康子を追い神戸にきた苦の多木は、岡本の早呑み込みと神戸の雰囲気の中で英子を抱きしめた。英子をみつけた多木は淡路島へのドライブに出かけたが、その後に中年の男と寄りそつて歩いている康子を目撃した。その衝撃を負つて帰京した多木のもとに康子からの届託のない電話が入った。十日間の休暇をえた多木は、北海道へのドライブに妻子と出かけた。札幌から海岸沿いの国道を通り、さいはれの村島牧に向つた。その村は、難病にかかる象の花子が温泉で闘病していることで、かつて新聞に報道されたことがあった。

島牧についた二人は、花子を見舞い花子の世話をしているS氏と親しくなった。S氏を招いて夕食を共にし、動物談議から愛と性へと話は発展した。二泊して二人は帰京した。帰京した多木に英子から電話があり、東京へ遊びにいくといふ。OKした多木は、新幹線東京駅まで出迎え、二人は若者の街ジョウジの夜を楽しんだ。その後、多木と英子は久しぶりにたがいの愛と性を燃やした。

三日後、英子は帰郷した。コープに帰つた多木は東京を離れる決意をし部屋を整理した。その時康子から電話があり、東名高速の浜名湖サービスエリアで逢う約束をした。

しばらくごぶさたしていた東名高速であつた。環八から、東京ICに愛車を乗り入れると、多木は、たちまち

る。

MVはスピードをあげた。厚木までの三車線、MVは、いつものように、先行車をごぼう抜きに抜いていく

水にかえつた魚のように、いきいきした気分になつてくる。

た。もう身も心も軽いが、愛車までかるがると宙をとんでもいるようであった。

厚木から、丹沢、足柄を越えて、御殿場にでると、富士が待っていた。いつもよりくつきりと、その雄大な山容をおしげもなく、多木にみせてくれた。

多木は、わけもなくうれしくなった。こうして美しい富士に迎えられている自分が、いま、とてもなく幸福感をおしげもなく、多木にみせてくれた。

富士に見送られながら、MVは、富士IC、静岡ICなどをいっ気にとばし、浜名湖上のS字型の橋をわたる、もう浜名湖SAの駐車場にすべりこんでいた。

約束の午後三時より、二、三十分もはやく着いてしまった。宇津康子は、いま、どの辺を走っているか。名古屋か、豊橋あたりか。多木は、SAのテラスに腰をおろして、康子の到着を待った。

コーヒーを喫しながら、三時になつたが、康子はあらわれなかつた。三時半になつても、まだ姿をみせない。どうしたのか。以前から、時間には凡帳面な女だつたはずである。

四時になつた。だが、まだだつた。約束の時間に一時間もおくれるなど、今までないことだつた。なにかあつたのか。

さらに小半時間、多木は、カラになつたコーヒー茶碗をまえにして、ひとりテラスの椅子にすわつていた。まちがいなく、なにかがあつたのだ。

事故にでもあつたのか。神戸から三百キロちかくも、ハイウェイを突つ走つてくるのである。途中事故にあわないという保証はない。だが、そういう不吉な予想を、多木は、自分で追つ払つていた。一時間や一時間半の遅れで、すぐ事故にむすびつけるのは、少々神経質すぎるというものである。

とすれば、出発まぎわになつて、なにか急用でもできて、出発がおくれたのか、あるいは、出発できなくなってしまったのか。これは、ありうることである。

だが、もしもそうだつたとしても、康子のほうからは連絡のしようがない。むろん、多木のほうからも、事情を問い合わせるすべはなかつた。彼は、彼女の住いも電話番号も教えられていかつたのである。

くるのか、こないのか、見当もつかぬまま、多木は、手をこまねいて待つよりほかはなかつた。しだいに、彼は、いらだつてきた。

つくねんとテラスの椅子にすわつたまま、ようやくたそがれの気配のただよいたした浜名湖の湖面をみおろしながら、ふと、多木の脳裏に、神戸の夜の街で、あの後ろ姿を垣間みた中年の外人の男のことが浮びあがつた。康子がいまだに姿をあらわさないのは、もしかしたらこの男に原因があるのでないか。多木には、そんな気がしてきた。仔細はない。それは、いわば彼のカンのようなものであつた。

だが、多木は、自分のカンには自信があつた。康子があらわれるのは、あの外人に原因があるとしか思えなくなつた。康子があの外人に黙つてでかけようとした聞き方に、あの外人があらわれて、彼女は、でるにでられたくなつた。そうにちがいない。

多木は、大きく吐息した。いらだつていた多木の胸は、微妙にゆらいでいた。

といつて、彼には、どうする手だつてもなかつた。身動きがとれないものである。約束の三時から、そろそろ二時間ちかくになつていて了。康子は、くるのがおくれているのではない。このぶんでは、もうやつてこないとみなすべきだらう。

だが、女においてきほりを食つたからといって、多木は、いまさら東京へひきかえす気にはなれなかつた。彼はもう東京を捨ててきているのである。

それにしても、康子が約束を破るような女だつたとは、多木は、今までいちども疑つたことはなかつた。こんどだつて、彼女のほうから、デートの誘いをかけてきたのである。多木は、土壇場になつて、この女から裏

切られたような気がした。

しかし、いつまでテラスの椅子に腰をおちつけていても仕がない。独りで、これからどこへいこうか。もうあきらめきつた顔で、椅子からたちあがった多木のまえに、小走りで康子があらわれたのは、五時をだいぶすぎたころであった。

「ごめんなさい。こんなに待たせてしまって」

康子は胸をはずませて言った。彼女自身も息せききつてかけつけてきたといった感じであった。

「もうしごれを切らして、ここにいらつしやらないかと思つたわ」

「そうだな。あと十分おそかつたら、たしかに、もうここにはいなかつたな」

多木は、康子があらわれたことが、いまではふしげで

ならぬような面持ちで言つた。だが、さすがに彼は、ほつとした気持ちになつてゐた。

「でかけようとしたら、きゅうに来客があつて、気になりながら、つい話しこんてしまつたのよ。女つて、話しだすと、長話になるでしょう。わるい癖ね」やはり、多木の予想したとおりだつた。だが、たずねてきたのは、女客ではあるまい。あの外人にちがいない。彼はまだ自分のカンを信じていた。

しかし、いまはまだ黙つていようと、多木は思つた。いずれはふれねばならぬことである。女のほうで言いのがれができないような雰囲気で、彼は、問いただすつくりだすつもりであつた。

「喉、かわいたろう？ コーラでも飲む？」

「ええ」

多木は、テラスから店内にはいって、二人ぶんのコーラを自分でさげてきた。

「今夜の予定は？」

かわいた喉をうるおしながら、康子は、やつとひとこちついたようにたずねた。

「そうだな」

多木は、腕の時計をみながら言つた。

「もうあまりとおくへもいけないな」

五時半をすぎていて。

「ちかいところで、鎌山寺へでもいこうか」「いいわ。あなたとはじめて逢つて、泊つたところね」「うむ」

思い出が、多木の記憶に、虹の橋を架けた。思い出の虹は、七彩の鮮烈な光芒を放つてゐるが、それでいて、あくまでもおぼろで、むなしいまぼろしの橋であつた。それはちょうど、この女との愛の歴史を、そのまま物語つてゐるようであつた。

「いこうか」



でると、浜名湖の北岸の道をまわって、三十分たらずで、館山寺についた。

シーズンオフのせいか、館山寺はひつそりと夕闇のなかに沈んでいた。宿も、このまえ泊ったおなじホテルをとることができた。

二人は、ひと気のない三階の部屋にとおされた。

「あら。この部屋も、まえとおなじじゃない?」

康子は、室内のたたずまいをながめながら言った。

「そうだったかな。そういうえば、そうかも知れない」

多木の記憶はあいまいだった。だが、まえとおなじ部屋だったとすれば、これも、なにかの因縁というものであろう。多木には、いい思い出になつた。

ボーアイが去ると、康子は、自分から多木の胸に面をうずめてきた。男の背に両の腕をからませ、男の身体にすがりついてくるような感じであった。こうして康子のほうから積極的に男の愛撫をもとめてくることも、この女にしてはめずらしいことだった。

多木は、康子の身体をうけとめ、唇を重ねながらも、康子のこの烈しさは、やはり、あの外人のせいにちがいないと、また思われだしてきた。あの外人とのあいだに、なにかがあったのか。それがなにかは、まだわから

ぬ。だが、多木は、自分のカンがもうまちがいないものと確信が持てた。

温泉につかり、夕食をすませ、地階のバーで食後の酒を喫して、三階の部屋に引揚げてきたのは、まだ十時までであった。いつもの二人なら、これから夜の遊びのはじまる時刻である。

「もうやすみましょうか」「うむ」

二人は、早々にベッドにはいった。

二人は、すぐ抱きあつた。なにかに追われるよう、二人は、たがいの身体をまさぐりあつた。

だが、ベッドのなかでも、やはり、康子のほうが積極的だった。すぐ、彼女の身体は燃えあがつた。その燃え方は、もの狂わしいほど烈しかつた。紅蓮の愛の炎で、われとわが身を灼きつくそうとしているようであつた。

こんな康子も、むろん、はじめてだった。

だが、多木も、その熱狂の愛によく応えていた。今のように、多木の若い肉体もまた、康子に劣らず、灼熱の炎をあげていた。

(つづく)

☆新しい関西を創造する総合雑誌

オール関西

<3月号・創刊8周年記念号予告>

☆グラビア「女の四季」池坊保子

〃 「万葉記」 ⑫犬養 孝

〃 「And His Ladies」

大野正雄

〃 「私の散歩道」宮崎辰雄他

☆連載対談／梅棹忠夫 山崎正和

☆アラブ大使の声③／アルジェリア

☆現代と伝統③／吉田光邦

☆わが社を考える／ダイキン・山田稔

他

☆対談／元町れんが道完成

「道を考える」

水谷顕介 野口武彦

☆今月の視点／林屋辰三郎

☆「織田作之助伝」②／大谷晃一

☆「大阪物語」⑦／石濱恒夫

☆「夕ぐれに苺を植えて」⑥足立巻一

☆戯曲「東山」／伊藤邦輔

月刊 オール関西編集部

大阪市北区梅ヶ枝80 梅新東ビル7階

TEL 06-364-2434~7(代)



ね。春はもうすぐそこです。我々神戸市民が快適な生活が出来るのは何日のことでしょう。

後編
記集



経済大国のお偉方はこんな実態をご存知なのだろうか？（橋本 明）

★神戸の町は、明るくすました、ク

やつて来て、さっそく僕は神戸っ子を片手に神戸を案内しました。そしてまたまた神戸っ子が大変役に立ちました。タウン誌のしにせなどと紹介されたりすると感無量。これもひとに皆さまのご支援に心から感謝です。

の異人さん、若いつくはるさんは、とてもおもしやれで、もっとする美人さんは、ママの年、気にしないで、おしゃれを楽しめ、きまつて、食べて、飲んで生田新道は、ママの道。(仙台市とくひかる)

★新年号より始まつた神戸百景シリ
ーズ新しいアイデアとしてコレクション
タップの努力の後がうがえます。
今年こそマンネリ化して、どん
どん新しいアイデアを期待してい
ます。激動の一九四七年も、はや三月、
石油危機はおさまつたものの、一時
止まらないのは諸物価の値上がり、
何でも神戸の物価上昇率は全国一だ
とか…………。何とかなりませんか
（北区 馬鹿番）

発行にいろいろお世話いただいた方がた

小小鴨柏嘉嘉金小小岡牛櫻石石乾砂青朝安
曾比泉林磯居井納納井野根崎尾並野野野木奈部
徳芳良健毅正元一真吉正成信豊重正
一夫平玲一六治彦夫造忠朗一明一彦仁雄隆夫

竹津玉田 田瀧滝竹 角砂塙 新白雀 阪坂古後上 小
馬高井中宮川川中南田路 谷川部本井林藤林林
準和 健虎勝清 猛重義秀 昌時喜末英秀
之助一操郎彦二一都夫民孝雄渥介勝忠樂二一雄

神行元百村光宮宮松福深畠野南難中中西西直外
戸青吉永崎上田地崎井富水沢部波西卷脇村木島
年会哉定辰正顕襄辰高芳惣專幸圭太健
議所女正雄郎治二雄男美吉郎郎三還勝弘親功郎吉

「お父さんの跡を續けた」とか「先に逝つてまろかわかれへん」とす
き間風の吹く部屋で淡淡と語る老人



A cartoon illustration of several small, round, smiling characters with long noses, standing behind a larger character with a bow tie.

★月刊神戸っ子を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸を離れてどけないお友達に、神戸の香りをおとどけて下さい。申込のみ下さい。さっそくお送りします。

ラ
ン
書
房
★月刊神戸っ子に広告を掲載ご希望の方は編集会室へお申込下さい。月刊神戸っ子編集室内にあります。丁合区布引町4番目

子★の☆月刊糸戸は糸戸本店集室に会室へのお事務申局します。は月刊神戸戸へ申告を掲載ご希望。月刊神戸戸へ申告を掲載ご希望。

★発行 / ★編集・発行 / 小泉康夫
★発行所・神戸つ子編集室
神戸市生田区東町113の1
49年3月1日

神戸のうまいもんとドリンク

★日本料理

阿なご寿司 青辰
神戸市生田区元町通3-184
TEL 331-3435

讃岐名代うどん あこや亭
神戸市葺合区旗塚通7-5 TEL 231-6300
トアロード店 TEL 391-2538
兵庫駅前店 TEL 575-5306

和食くれない
三宮生田新道浜側中央
KCBビル2F TEL 331-0494

かっぽう花くま
神戸市生田区花隈町45
TEL 341-0240

物もの・おむすび 悟味西
神戸市生田区北長狭通1の20 TEL 331-3848
三宮さんちかタウン TEL 391-5319

お茶漬・おむすび 小さる里
神戸市生田区北長狭通2の1
TEL 331-5535

たこ焼たちばな
三宮センター街(旧柳筋) TEL 331-0572

北海道郷土料理 蝦夷
神戸市生田区中山手通1丁目115
生田区東門筋東門会館ビル1階
TEL 331-7770

李面料理 婆婆羅(ばさら)
神戸市生田区北長狭通1丁目18
三宮阪急西口北側レインボーアクセス1・2F
TEL 321-6363

★西洋料理

レストラン アボロン
神戸市葺合区八幡通5丁目6
TEL 251-3231

レストラン 肉皮^{あらかわ}
神戸市生田区中山手2-9
TEL 221-8547・231-3315

GALLERY & STEAK HOUSE SAN-MON 三門
神戸市生田区中山手通二丁目98/99
TEL 331-5817

ステーキハウス れんが亭
神戸市生田区下山手通2丁目34
TEL 331-7168

レストラン セントジョージ
神戸市生田区北野町1丁目130
TEL 242-1234

レストラン 男爵

神戸市生田区中山手1-18
山手第一ビル1F TEL 241-0778

maison de la mode 花屋敷
三宮フラワーロード市役所前
TEL 251-2109

鉄板グリル きやんどう
神戸市生田区北長狭通2-22
TEL 331-1183

レストラン キングスアームズ
神戸市葺合区磯辺通4-61
TEL 221-3774

居酒屋風 井戸のある家
生田新道新世纪南
TEL 331-5664

レストラン ムーンライト
三宮・生田新道
TEL 331-9554

串かつ店 和蘭陀屋
三宮相互タクシー北入
TEL 321-0230

グリル・鉄板焼 月
神戸市生田区北長狭通1-24
生田神社前 TEL 331-2509

BARBECUE & STEAK 六段
生田区元町通3丁目
TEL 331-2108

イタリア料理 ドンナロイヤ
明海ビル地階 TEL 331-7158

レストラン ハイエイ
神戸市生田区下山手2-20
TEL 331-7622

ピッツアハウス ピノッキオ
神戸市生田区中山手2-101
TEL 331-3545

レストラン フック東店
神戸市生田区栄町1-5-3
TEL 321-3207

ピザ&スパゲティ ガルの店
葺合区琴絃町5丁目1-7
西山ビル1F TEL 241-9025

レストラン ミリオナークラブ
生田区山本通2丁目50の2
レストラン 231-9939-5
メンバーズ 221-1162

フライマックスの店 エル・ヴィノ
神戸市生田区北野町3丁目48 アニルドマンション1F
TEL 241-1344

ファーストウェスタン 口一ストシティ
神戸市生田区三宮町3丁目22
TEL 331-3770

RESTAURANT & BAR ゴックスタッド
生田区山本通3丁目18 回教寺院前
TEL 242-0131

メキシコ小料理亭 ティファーナ
神戸市生田区中山手通1丁目4-12 バルコーボラスピル1F
TEL 242-0043

ドイツ風 音楽レストラン コーベ・ローライ
生田区北長狭通6丁目39
TEL 371-0003

★喫茶

宮水のコーヒーにしむら珈琲店
中山手店 神戸市生田区中山手通1丁目70
TEL 221-1872-231-9524
センター街店 神戸市生田区三宮町2丁目35
TEL 391-0669

modern Jazz & Coffee さりげなく
生田区北長狭2-22 TEL 331-9762

喫茶・レストラン パロモン
神戸三宮サンプラザ地下 TEL 391-3758
トアロード店 TEL 391-1210

喫茶 ガーディニア
神戸市生田区東町13-1 大浦ビル1F
TEL 321-5114

珈琲モーツアルト
神戸市生田区山本通2丁目98グランドマンション1F
TEL 241-3961

★club

club 阿以子
神戸市生田区中山手2丁目89
TEL 331-6069

club 飛鳥
神戸市生田区中山手1丁目117
TEL 331-7627

club 工ドワーズ俱楽部
神戸市生田区北長狭通1丁目28
生田新道 TEL 391-3300

club 小万
神戸市生田区東門筋中島ビル3F
TEL 391-0638-4386

club 千
神戸市生田区中山手通2丁目75
TEL 331-7120

クラブ 千
神戸市生田区下山手通り2丁目21
TEL 391-1077

洋酒肆 仏蘭西屋
三宮生田新道相互タクシー北入
TEL 321-0230

club なぎさ
神戸市生田区北長狭通2の1 TEL 331-8626

club 落ふき
神戸市生田区下山手通2丁目 TEL 391-1515

club ぶーげん
三宮生田新道浜側中央KCBビル5F
TEL 331-8593

club Moon Light
BAR TEL 331-0886-391-2696
Club TEL 331-0157

クラブ ふらん
神戸市生田区北長狭通1丁目53 TEL 331-2854

★STAND & SNACK

スタンド 英国屋
生田区下山手通2-6 相互タクシー横
TEL 331-1100-331-6600

スタンド グラムール
生田筋岸ビル地階 TEL 331-4637

SNACK MATSUMOTO
神戸市生田区中山手通1丁目32番3
曾根ビル1F TEL 241-5470

カクテルラウンジ サヴォイ
高架山側 テキの店北
TEL 331-2615

スタンド さりげなく
生田筋上高地西入 TEL 331-3714

洋酒ハウス 雜貨屋
神戸市生田区下山手通2丁目
PHONE 078-321-0860

スナック ビジービー
神戸市生田区中山手2丁目
TEL 391-4582

居酒屋 ボルドー
生田新道浜側中央KCBビル1F
TEL 331-3575

スナック イザザ
生田社西門伊藤ビル地下
TEL 331-1429

洋酒の店 キヤンティ
神戸市生田区北長狭通2丁目3
TEL 391-3060-391-3010

スープとパン店 キヤンティ北店
神戸市生田区下山手通3丁目8-9 TEL 331-3661

DRINK SNACK スネカリッ子
神戸市生田区下山手通2丁目
水見ビルB1 TEL 391-8708

Stand&Snack サントノーレ
ディー＆ドリンク
生田区下山手通2丁目トア・ロード
TEL 391-3822

Salon de roulette サントノーレ
バンドラ
ルーレット教室
神戸市生田区中山手通1丁目24-7
ダイワナイトプラザ6F TEL 391-3822

スナック でつさん
神戸市生田区北長狭通1丁目原平寿司3番
TEL 331-6778

STAND アトラス
生田区中山手通1丁目95
TEL 331-5433

スナック GASTRO
神戸市生田区中山手通3-20
トアマンション TEL 231-0723

スタンド クラブ・ガーデニア
神戸市生田区中山手通1丁目115
東門筋中島ビル2F TEL 391-3329

SNACK 山の手
神戸市生田区中山手通1丁目
ソネビル1F TEL 221-3637

スナック 比奈古多
とうふ料理
神戸市生田区北野町1丁目143
Tel. 241-1306

サロン アルバトロス
生田区中山手通り1丁目24の7
大和ナイトプラザ1F-B TEL (231)3300

スナック エルゾタノ
神戸市生田区下山手通 TEL 331-6620

スナック 山莊
神戸市生田区北長狭通1丁目22
TEL 391-5823

スナック 紋
神戸市生田区北長狭通1丁目41-1 レンガ筋
TEL 331-8858



あるウイスキーの生誕

ロバートブラウン物語

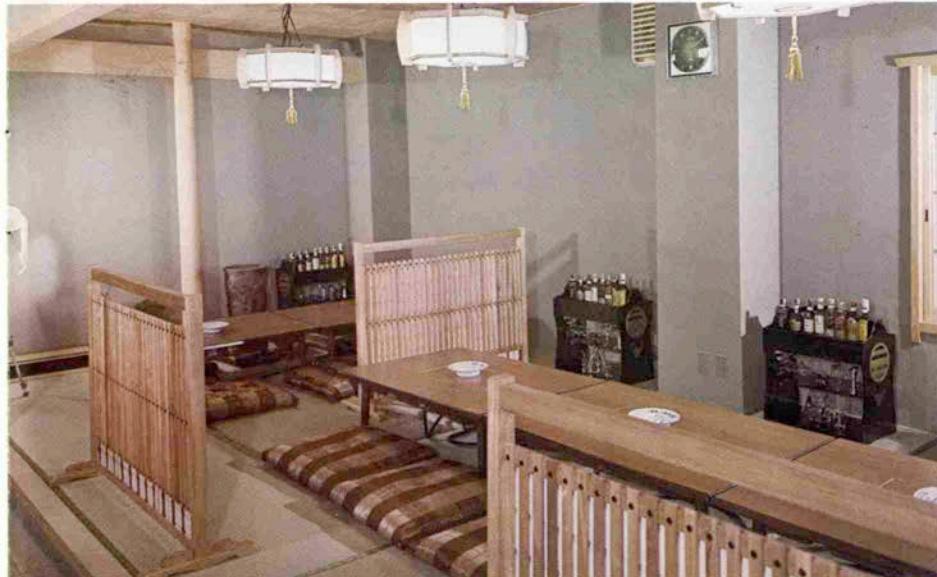
物語の作者は、キリン・シーグラム株式会社。キリンと、世界屈指の洋酒メーカーとして有名なシーグラム、そしてスコッチの名門・シーバスブラザーズ、この三社の提携による合弁会社です。物語の主人公は、シーバスブラザーズ秘蔵のスコッチ原酒をたっぷりと使った高級ウイスキー。物語の読者は、あなたです。そつと口に含むど

き、やあ芳醇な物語の開幕。新発売



スコッチの血筋をひく高級ウイスキー
ROBERT BROWN
ロバート ブラウン / 760ml 2300円
キリンシーグラム株式会社

Kobe Beef つる牛亭 Tsuruushitei



2F

すき焼 1,800円
しゃぶしゃぶ 2,000円
肉さし 1,500円
石焼き 3,500円
特級酒 300円 ビール大 300円

つる牛亭牧場 兵庫県出石郡出石町宮内
電話 (079649) 6847番

肌も姿もすぐれた上に味もよいぞえ但馬牛

蔓牛の由来／但馬地方は兵庫県北部にあり牛の産地として千五百年前より自然の環境に恵まれて育れ、「神戸牛」「松坂牛」「近江牛」の元祖牛となる但馬牛を生み、この日本一の基礎牛は優れた肉質形質を強力に遺伝する優良系牛のことで別名「蔓牛」と呼ばれ、世界一の牛肉の味を誇っています。

通に贈る神戸ビーフの元祖牛「但馬牛」産地直送の



ステーキ・すき焼・しゃぶしゃぶ

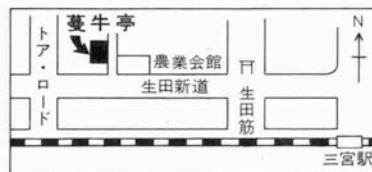
蔓牛亭

つるうしてい

神戸市生田区下山手通り2丁目29(農業会館西入る)

Tel 078 (331) 8891・7957

神仙閣となり



1F 12:00PM~1:00AM
2F 12:00PM~10:00PM



1F

ステーキ

ヘレ W 4,500円

S 3,500円

ロース W 4,500円

S 3,000円

スープ 400円

J & B 300円

(ボトル) 6,000円



●日本の風土がかもしだす四季おりおりの旬の味覚を存分に
それも最高の雰囲気でお召し上りいただく季節料理の店が
誕生しました。



婆娑羅定食.....七〇〇円
●●●
香のもの
赤だし・すいもの
和へもの
感が味わえます。
お好みにより季節の旬の焼魚
お刺身・茶わん蒸しなどを追
加いただければ、一層の季節



カニ料理「ばさら」

婆娑羅

電話(078)321-6363

阪急三宮西口北側レインボープラザ1・2F

ホテルアーレのばさら直営店

民芸風 の落ち着いた大小の
お座敷と、お気軽な
テーブルの御食事処



ビール又は日本酒

お1人様1本サービス

◎鍋物4名さま以上に

うどんすき	¥ 600
寄せ鍋	¥ 800
すき焼	¥ 1,000
しゃぶしゃぶ	¥ 1,000
かにちり	¥ 1,200
魚ちらり	¥ 1,200

●ランチタイム・定食二割引

※御宴会は80名様迄・ご家族様の小部屋もございます。

民芸風 お食事処
鍋物・会席

樂 珍

阪急三宮西口北レインボーブラザ3F

三宮阪急西口店 ☎321-5200(代表)



DRINK & SNACK
スネカジリュ子

生田区下山手通 2 丁目30

永晃ビル地階

☎ 391-8708



DRINKING IS AN ART OF LIFE 生田区中山手通 1 丁目32

WOODHOUSE

山内ビル

☎ 241-7320

KOBE DRINKING GUIDE

wine room
SAKA

生田区中山手通 2 丁目93

東洋ビル 2 階

☎ 391-2323



restaurant
ダリア

三宮ビル南館地下 1 階

(そごう別館)

☎ 251-7808



★陽射しも段々と春めいてきたようです。北風に縮みあがっていた町も人も、やわらかな光に包まれ、活気づいてきました。“スネカジリッ子”も春を迎え、ますます、賑やかになってきたようです。いつも若い連中がいっぱいの“スネカジリッ子”には若者を引きつけて離さない魅力があるようです。その秘密は、イキな店造りとそれがかもし出すステキな雰囲気にあるのはもちろん、何よりも陽気な店のメンバーにあるのです。春は新しい仲間のできるとき。新しい仲間ができたら、まず、“スネカジリッ子”へ。初対面であろうとなかろうと、すぐに和気あいあいとなってしまうのです。“スネカジリッ子”とはそういう店なのです。

☆水割G&G ¥300 ビール(小)¥250 おつまみ¥100 ピツツ ¥350

ミニチュアピン(W)¥500

5:30 P.M. ~ 1:00 A.M. 第1・第3月曜日休み



スネカジリッ子

KOBE DRINKING GUIDE

SAKA



★北風も遠のき、どうやら春めいてきました。重いコートにさよならをする季節です。こんなときワインルーム“サカ”的スペースはあなたに充実した春の一宵を約束します。マスターの坂谷さんは、にがみ走った顔にオリエンタルホテル時代のスマートさがピタッと決っている。しかし、ただ飲むだけでは面白くない。そんなときには、ギターの先生に声をかけてみよう。見かけによらずゆかいな人で、ギターの腕前はいわすらもがな。いい気分で歌えます。そして、“サカ”的魅力は店の女性のフレッシュさに尽きます。春宵一刻価千金。飲んで、歌って、笑って“サカ”で過ごす夜は千金にも万金にも値すること受け合いで。ボックス席もあるのでグループで楽しくやっても最高ですよ。

☆水割り(オールド)¥450 ビール¥400 ボトル(オールド)¥6,500

ボトル(リザーブ)¥7,500 つき出し(各種)¥300 鍋物類(各種)¥500

6:00 P.M. ~ 2:00 A.M.

★寒い寒い冬もようやく終りを告げ、神戸の街も春のおとづれの弥生3月。皆様いかがお過ごですか……。なんとなく心ウキウキの季節になりますと、“ウッドハウス”的店内もホンワカムードのカップルの姿がアココで……。なかには、「流れ者には女はいらねえ」とキザッている一人者がさみしく飲んでる姿……。とにかく春はいいですね。ところで、昼の部「目玉商品」ランチがすごく好評で、早くお知らせしなくてはと思っていたが、ついついおそくなり……かんにんな!! ライスにやさしいサラダ、それに一品物にスープ付で250円(安~いです)11時30分から1時30分頃まで。早く行かないと品切れまちがいなし。一度行ってみてください。

☆昼(11:30A.M.~7:00P.M.) コーヒー¥150 紅茶¥150 ピラフ¥250

サービスランチ¥250 夜(7:00P.M.~4:30A.M.) ビール(小)¥250

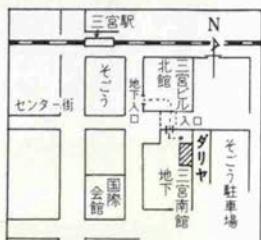
水割り(OLD)¥350 フィズ¥400 おつまみ¥100 平日11:30A.M.~

4:30A.M. 日曜5:00P.M.~0:00A.M. 第1・3日曜日休み



ウッドハウス

ダリア



★春の味はレストラン“ダリア”から。

このたび、“ダリア”に絶対の自信をもってみなさまにおすすめできるメニューが登場いたしました。それは、コンビネーションプラン。お好みの品が二皿セットされたランチメニューです。4種類あり、手頃なお値段で楽しんでいただけます。おかげさまで好評をはくしておりますが、まだご存知ない方にもぜひおすすめしたいと思います。ご注文のときは、“コンビ”とお呼び下さい。きっと、お気に召すものと思います。

☆ダリアスペシャルステーキ¥800 サーロインステーキ¥1,800

牛ヘレ最上用のステーキ¥2,000 牛ヘレ肉の煮込みストロガノフ風

¥800 ピーフシチュー¥800 タンシチュー¥800

11:00A.M. ~ 9:00P.M. (ディナータイム 5:00P.M. ~)

木曜日休み